

高校同期生2011年度登山旅行（番外編）

日光・女峰山(にょほうさん)に登る



毎年恒例の高校同期生登山旅行が、9月26日～8日日光～那須で行われた。

その一日前に日光入りした私は、レンタカーで奥日光に赴き、戦場ヶ原などを歩いた。

秋の訪れが遅れているのか、花も少なく、紅葉には早すぎて、少々物足りなかったが、台風の後だけに溪流の水量は豊かで、

専女山から見た女峰山 ほとぼしる水の音が森や湿原に響いていた。

最初に散策を切り上げ、光徳から裏男体林道を通して志津乗越（のっこし・標高1785m）に着いた時はまだ明るい時分だった。ここは男体山（100名山）の真裏にあたり、北側に聳える女峰山（200名山）との間の峠なのだ。この峠は二つの山に登る登山基地なので、数台の車が駐まっている。夕食の準備をしている間にも幾つかのパーティーが下山してきては、あいさつを交わして車で去って行った。

食事の後片付けを済ませ、寒さに備えてシャツにセーターを重ねていると、ランプを光らせて4人の男女が女峰山の方から降りてきた。声をかけると「疲れたあー、下りの林道が長くて！」が女性の第一声だった。リーダー格の男性に登山道、水場、岩場、所要時間などについて聞き、彼らが乗り込んだ車を見送ると、夕闇が急に濃さを増し、くっきりとしてきた山の端が空の蒼さを際立たせた。

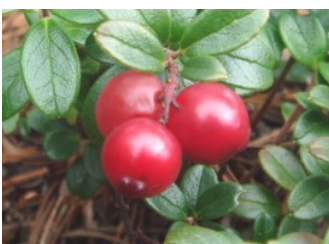
人も車も居なくなった。山中での孤独の夜は何もする事が無い。シュラフにもぐりこみ、道々目にした「熊出没！注意」の赤い文字を思い出しながら眠りに就いた。

オリオン座 目に焼き付けておこ

下 コケモモの実 2回目に目が覚めたのは3時過ぎだった。車外に出ると寒さに身震いしたが、四方の山々によって狭められた空には無数の星が瞬き、オリオン座が中天に向かおうとしていた。小さい時から、唱歌「冬の星座」で「オリオン舞い立ち」と歌い、最も親しんできたオリオ



ヤマホトトギス



ン座、そのオリオン座の一番明るい星・ベテルギウスが近々爆発して無くなると言う。テレビの特集番組で納得はしたものの、未だに信じられない気がする話だ。

この星と私の寿命、どちらが先に亡くなるのか知らないが、星の終末を見たくないとも思うし、看取ってやりたい気もするのだ。谷村新司ではないが「せめて鮮やかに、その身を終わ」って欲しいと思いたいのだが、爆発の際に地球に降り注ぐ放射線の影響も取りざたされていて、そう単純でもないようだ。640 光年というはるか彼方の星なのに。

兎に角、今のうちにしっかりと観て、目に焼き付けておくことにしよう。

突然 闇の中から

星空を仰いで感慨に耽っていると、遠くでがさがさと音が しだした。場所も場所なら、時も時、ぎょっとして目を凝らしていると木の間ごしに灯かりが見え始め、間もなく一人の人間が闇を背負って現れた。挨拶の声は男のもの。どうしたのだと問うと、昨日日帰りのつもりで男体山に登り、道に迷って志津避難小屋に泊って、今から徒歩で下山するところだ、と言う。バス停まで2時間以上かかる、夜明けを待つべきだというのが、朝までに帰宅したいのだとの答え。御家族の心配を考えると仕方が無い、こちらも起床することとし、車で人家のあるバス停まで送った。道々ヘッドライトの光芒をキツネが2度、シカが一度横切って藪に飛び込んだ。

ハードだった女峰山登山

志津峠に帰り着いたら5時近くになっており、朝食を済ませて5時30分ヘッドランプで林道を照らしつつ出発。すぐに明るくなったが、凹凸の多い路面に気を使いながら歩き、7時に荒沢出合に。流れのある谷を渡って樹林の中を登ると水場があり、8時半に唐沢小屋着、立派で清潔な避難小屋だ。

ガレ場の急坂を歩いて9時10分頂上着。標高2483m。鋭く上がったピークだけに眺めはこの上ない。眺望を楽しんだ後急峻な岩場を下り、痩せ尾根を辿って専女山、帝釈山を通過し、富士見峠に下る。この下りは針葉樹主体の樹林の中、急で荒れた道になっている。手入れを怠った登山道が山そのものを荒らす典型のような道で、そこを登山靴で踏んでいることに罪悪感すら覚える。

全く彩りに欠ける嫌な道を下り終えると富士見峠に出た。ここから長い林道歩きを経て11時半志津峠に帰り着いた。

日光駅前に仲間たちが集まるのは午後3時だから、十分間に合うだろう。

←帝釈山から。遠景中央に白根山（以上142号）

